〔資料紹介：宮古の神歌〕

旧城辺町　友利集落のウイヌプヤー・ムトゥの神歌ヨンテル

本永　清（元宮古島市総合博物館協議会会長）

このヨンテル（世満ちよ）という神歌は、1996 年 4 月 3 日、旧城辺町砂川集落にお住まいであった友利ハルさん（大正 6 年 9 月 15 日、友利生まれ）にご自宅で歌って貰ったものである。

当時、旧城辺町では町史『民俗編』の刊行へ向けて、町内の各集落の民俗調査を行っていた。私もその調査員の一人に加えて頂き、当日は事務方の下地順子さんとともに、昔の生活や民俗に詳しいというハルさんを訪ねていろいろとお話を伺った。その中で、ハルさんは隣りの友利集落から嫁いできたこと、それで現在、友利に所在する拝所ウイヌプヤー・ムトゥ（上の大家元）の神女サス（佐司）を任されていることを知った。この神歌は、そうした一連の話の流れの中でハルさんに歌って貰ったものである。傍で下地さんがカセット・テープに録音し、歌詞は後日、同テープの音源に基づいて私が文字化した。

ただし、調査は今から約 30 年前のことである。この神歌ヨンテルに関して何を聞き取ったのか、その記憶が定かでない。ただ、歌詞の後半部分でンナフキャの神が登場し、神女たちの草装・木装のことも歌われていることから、この神歌はンナフキャ祭祀の中でハルさんを始め、他の神女たちが草装・木装して輪舞しながら歌っていたものであろうと推測される。ここで輪舞を持ち出すのは砂川集落のンナフキャ祭祀の事例を見ているからである。ンナフキャとは「海の大祭（ほかひ）」の意であろう。宮古では一般に、ンナフキャ祭祀にはユー（豊穣・豊漁などの富）を運ぶ龍宮の神々が人里を訪れて、そのユーを各家に分配して回るという。ユーはヨ、またはヨーともいう。このヨンテルの歌名がその一例である。

さて、話を元に戻すと調査時の記憶が定かでない中での歌詞の紹介となるが、それでもこの歌詞は宮古に類歌が多いだけに、それらの類歌を解釈する上で大いに参考になると思われる。それでハルさんへ感謝の念も込めて本誌上に掲載させて貰うことにした。歌詞の中には多くの神々が登場する。各神に注を付すに当たっては、主に平良市教育委員会発行の『平良市史第九巻資料編 7（御嶽編）』(1994 年 3 月 31 日) の解説を参考にした。同市史の友利・砂川両集落の執筆担当は、故・宮里久男先生である。その他、私が所持する民俗資料も注記に活かした。

なお、当初予定の町史『民俗編』の刊行はその後 2005 年に行われた宮古の市町村合併により立ち消えとなったが、新しく誕生した宮古島市ではその後「宮古島市史編さん委員会」を立ち上げて、すでに『宮古の祭祀（上・中・下）』を刊行している。

◎ヨーンテルの歌詞

原　　歌	対　　訳
1　あさだつぬ　ぴゃーだつぬ　にがまい よー　んてる（以下、省略）	1　朝立ちの、早立ちの（神々を）　願われて 世（豊穣・豊漁などの富）、満ちよ！

【語注】〇あさだツ　ぴゃーだツ　朝早く旅立つ神々。ンナフキャ祭祀に来訪した龍宮の神々を見送るのであろう。ンナフキャ祭祀はかつて、宮古の多くの集落で行われていた。今でもいくつかの集落では行われている。友利では旧暦 8 月頃に「神迎え」し、同 10 月には「神送り」をしたという。砂川など集落によっては草装・木装した神女たちが祭場でヨンテルという神歌を歌って輪舞している事例もある。**〇にがまい**　動詞「にがう」（願う）の連用形「にがい」の尊敬語。直訳すると「願われて」になろう。歌い手の神女たちは、神に成り代わって、つまり神の立場で、このヨンテルを歌って輪舞していると自覚しているため､その動作にも尊敬語を使うのであろう。願いなさって、お拝みになって、お崇めになって、の対訳も可であろう。**〇よー　んてる**　囃子詞。「よー」（日常会話ではユー）は豊穣・豊漁など、村人たちのさまざまな願いを包括的に表す語。その「よー」が満ち溢れるように、の意。以下、各番の終わりでくり返す。

【解釈】この歌い出しは、ンナフキャ祭祀の時に友利のウイヌプーヤー・ムトゥに来訪した龍宮の神々をその最終日の早朝、神女たちが見送る場面ということになろうか。その見送りに際し、神女たちはムトゥの氏子たちのために、いろいろと龍宮の神々に祈願するのであろう。神女たちが草装・木装して神々に扮していることは、このヨンテルの歌詞の最後で歌われる。以下、地元でカンナーギ（神名上げ）と呼ばれる神褒めの歌詞が連綿と続く。

2	くぬ　とぅくる　ゆぽうぬす　にがまい	2	この　所の、四方主を　願われて
3	みょーにぬす　みわぬかむ　にがまい	3	御船主、御岩の神を　願われて
4	ゆムなら　あさぬしゅー　にがまい	4	弓鳴ら神、父の主を　願われて
5	ばかどぅぬ　いでぃふきゃー　にがまい	5	若殿、門神を　願われて
6	あさぬしゅー　ムまてぃだ　にがまい	6	父の主、母天太を　願われて
7	やまとぅがム　ピすぎぱーや　にがまい	7	大和神、広げ婆は　願われて
8	ういかぬス　うみゃがま　にがまい	8	上所主、ウミャガマを　願われて
9	かームツどぅぬ　うぱツぬス　にがまい	9	川満殿、お初主を　願われて
10	まやまとぅ　さとぅぬかム　にがまい	10	真大和、里の神を　願われて
11	とぅゆムしゅー　すざうや　にがまい	11	響む主、兄親を　願われて
12	うぱーム　みゃーくあざ　にがまい	12	大按母、宮古兄を　願われて
13	てぃんてぃフく　ちょーぬぬス　にがまい	13	天筑、帳の主を　願われて
14	みズぬぬス　ばきゃぎぬス　にがまい	14	水の主、湧水主を　願われて

【語釈】〇くぬ　とぅくる　ゆぽうぬス　ウイヌプヤー・ムトゥ域内の子・寅・午・申の方角に祭る方位神であろう。**〇みょーにぬス　みわぬかム**　友利のツブガー・ムトゥの祭神。ツブガーは地元の漁船が出入りする小さな入り江であるが、渚の砂浜に散見される小岩にはンナフキャ祭祀の時に友利・砂川を船で訪れた龍宮の神々が艫綱を繋ぐという。なお、ンナフキャ祭祀は二回とも、同ムトゥでその幕を閉じる。**〇ゆムなら　あさぬしゅー**　このヨンテルの舞台であるウイヌプヤー・ムトゥの祭神。同神は、砂川のマイウイピャー・ムトゥの祭神「さーにゃーズ」と「ムみゃにゃーズ」との間に出来た第一子で、女神であるというが、ただし「あさぬしゅー」は「父

の主＝父なる神」の意であろうから、その性別判断には今後の検討が必要であろう。**〇ばかどぅぬ　いでぃふきゃー**　友利のイスカキ・ムトゥの門口に鎮まる神。**〇あさぬしゅー　ムまてぃだ**　友利のイスカキ・ムトゥに祭る夫婦神。「あさぬしゅー」を「あさてぃだ」（父天太）ともいう。前記の「ばかどぅぬ」は両神の子であろう。**〇やまとぅがム　ピすぎぱー**　友利のンニマ・ムトゥの祭神。口碑によれば、宮古島に大津波が押し寄せた時、高い山へ薪取りに登っていて、一人だけ助かった若い女性がいた。一方、宮古島近海で船が難破し、泳いで宮古島に上陸した若者がいた。その若者が、目の前を歩いて行く一匹の犬を見つけて後を追って行くと、洞窟の中に一人の若い女性が住んでいた。先の女性が犬と暮らしていたのである。若者と女性はやがて夫婦となり、宮古島民を産み広めたという。「やまとぅがム」はその男性、「ピすぎぱー」はその女性。**〇ういかぬス　うみゃがま**　友利の村番所、今の集落センターの敷地内に祭る夫婦神。ウイカとは「上なる所」、すなわち村番所。「うみゃがま」は女神名。なお、同センターと道路を隔ててウイミャガマ・ムトゥがあり、そこにも同二神が祭られている。**〇かームツどぅぬ　うぱツぬス**　川道殿という名の、神酒を司る神。同神を祭る拝所名は不詳。「うぱツ」とは神酒のこと。**〇まやまとぅさとぅぬかム**　マヤ・ムトゥの祭神マヤマトゥ・ウツヌシュウ（夫神）のことであろう。妻神はツカサガン・ウプユヌス（司神・大世主）。**〇とぅゆムしゅー　すざうや**　キズキャー・ムトゥの祭神、金志川金盛のことであろう。**〇うぱーム　みゃーくあざ**　友利のウパーン・ムトゥの祭神。神性は不詳。妻のミャークワーズは、ナカダチャー・ムトゥに祭られている。**〇てぃんてぃフくちょーぬぬス**　友利のティンティフク・ムトゥの祭神。帳簿の神。**〇みズぬぬス　ばきゃぎぬス**　友利アマガー（洞泉）に祭る水神。ここは対語になっているが、おそらく同一神であろう。

【解釈】この段落では、友利の各ムトゥの祭神を順次呼び出して褒め称えている。ンナフキャの神々だけでなく、地元の友利集落の神々からもユー（健康や豊穣・豊漁などの富）を賜わることを期待するからであろう。なお、神々の呼び出しには、順番があるようである。ここでは、まずウイヌプヤー・ムトゥ域内の子・寅・午・申の方角に鎮まる方位神から始まり、あとは同ムトゥからの位置関係、各ムトゥの祭神の階位などによって、神々が呼び出されているように見える。

15	ムまにゃーズ　さーにゃーぷズ　にがまい	15	母按司、父按司を　願われて
16	ツかさがム　かにどぅぬ　にがまい	16	司神、金殿を　願われて
17	かにどぅぬぬ　とぅキぬしゅー　にがまい	17	金殿（名）の、時の主を　願われて
18	なイかに　うすばぬス　にがまい	18	ナイカニ、お側主を　願われて
19	てぃんてぃフく　ちょーぬぬス　にがまい	19	天筑、帳の主を　願われて
20	にイぁズ　すみズぬス　にがまい	20	ニズヤ按司、清水主を　願われて
21	うぷムま　ピすぎぱー　にがまい	21	大母、広げ婆を　願われて
22	ぱツまる　ぶなざら　にがまい	22	初丸、ブナザラを　願われて
23	あズがなス　ツかさがム　にがまい	23	按司可那志、司神を　願われて
24	うぱーム　うぷとぅぬ　にがまい	24	大按母、大殿を　願われて
25	スまぬぬス　ざらどぅぬ　にがまい	25	島の主、座の殿を　願われて

26	かさびがム　あうがま　くいがま　にがまい	26	重ね神、アウガマ・クイガマを　願われて
27	ういかぬス　ちょーぬぬス　にがまい	27	上所主、帳の主を　願われて
28	みゃーどぅてぃだ　うぷゆーぬス　にがまい	28	宮渡天太、大世主を　願われて
29	やまとぅがム　かぶぬしゅー　にがまい	29	大和神、髷の主を　願われて
30	まさまる　うぱツがム　にがまい	30	マサマル、お初神を　願われて
31	ピぎたら　ゆーぬぬス　にがまい	31	髭垂ら神、世の主を　願われて
32	みズぬぬス　ぶなズがム　にがまい	32	水の主、姉妹神を　願われて
33	てぃんぬまツ　うぷゆーぬス　にがまい	33	天のマツ、大世主を　願われて
34	なぎゃーぷズ　さんぬぬス　にがまい	34	ナギャー大按司、算の主を　願われて

【語注】〇ムまにゃーズ　さーにゃーぷズ　「ムまにゃーズ」は、友利の隣りの集落・砂川のマイウイピャー・ムトゥの祭神。「さーにゃーぷズ」は、砂川のシシウイピャー・ムトゥの祭神。口碑によれば、かつて砂川村が大津波に襲われた時、村で一人だけ生き残った子供がいた。その子が成長して若者になった時、そのもとへ龍宮から女神が現れて妻となり、八名の子を産み育てた。女神はわが子たちの成長を見届けると龍宮へ帰っていった。後世、その女神は「ムまにゃーズ」、男性は「さーにゃーぷズ」と呼ばれるようになったという。**〇ツかさがム　かにどぅぬ**　砂川のウイダティ・ムトゥの祭神。「ムまにゃーズ」と「さーにゃーぷズ」との間に出来た子で、二男。**〇かにどぅぬ**　砂川のウイウス・ムトゥの祭神。「ムまにゃーズ」と「さーにゃーぷズ」との間に出来た子で、長男。「時」を司る神。**〇なイかに　うすばぬス**　砂川のウプ・ディラの祭神。夫婦神。キサマ・ムトゥの親神に当たるという。**〇てぃんてぃフく　ちょーぬぬス**　砂川のフファ・ディラの祭神。ウプディラの夫婦神の子に当たるという。**〇にイぁズ　すみズぬス**　砂川のナカヌムイ・ムトゥの祭神。**〇うぷムま　ピすぎぱー**　砂川のウプムマ・ムトゥの祭神。**〇ぱツまる　ぶなざら**　「ぱツまる」は砂川のパナタ・ムトゥの祭神。夫神。「ぶなざら」は砂川のマイキサマ・ムトゥの祭神。妻神。**〇あズがなス　ツかさがム**　砂川のクスキサマ・ムトゥの祭神。夫婦神。「あズがなス」は、砂川のマイヌヤー・ムトゥから入り婿で来たという。**〇うぱーム　うぷとぅぬ**　砂川のマイヌヤー・ムトゥの祭神。夫婦神。「うぱーム」は妻神。**〇スまぬぬス　ざらどぅぬ**　砂川のカンマザー（神の座）、今の砂川神社の祭神。**〇かさびがム　あうがま　くいがま**　前記カンマザーに合祀する姉妹神。1500 年宮古の首長・仲宗根豊見親の八重山征討に宮古から従軍した美女の二人だという。**〇ういかぬス　ちょーぬぬス**　砂川の村番所、今の砂川集落センターの祭神。帳簿の神。「ういか」は上なる所、すなわち村番所。**〇みゃーどぅてぃだ　うぷゆーぬス**　砂川のミャードゥ・ムトゥに祭る夫婦神。豊穣神。かつて保良村の東方、海岸近くに宮渡村があった。そこから砂川村に移住した人たちが、ミャードゥ・ムトゥを仕立てて拝み始めたという。**〇やまとぅがム　かぶぬしゅー**　髷をつけた大和役人の神格化であろう。**〇まさまる　うぱツがム**　砂川のピャーダティ・ムトゥの祭神。神酒の神。**〇ピぎたら　ゆーぬぬス**　砂川のユクイ・ムトゥの祭神。豊穣神。上野字野原の大嶽（おおたけ）御嶽の祭神を招聘して祭る。長髭を伸ばした神だという。**〇みズぬぬス　ぶなズがム**　砂川のパイヌサトゥ御嶽の祭神。姉妹神。**〇てぃんぬまツ　うぷゆーぬス**　砂川のウヤヌツカ・ムトゥの祭神。豊穣神。**〇なぎゃーぷズ　さんぬ**

ぬス　「なぎゃーぷズ」という「算木」の主。その拝所は砂川の、ある民家の近くに所在するという。

【解釈】この段落では、隣りの砂川集落内に所在する各ムトゥの祭神を順次呼び出して褒め称えている。砂川の神々からもユー（健康や豊穣・豊漁などの富）を賜わることを期待するからであろう。神々の呼び出しには、砂川でも友利の場合とほぼ同じ原則が貫かれているように見える。

35	あがイてぃだ　まむイぬス　にがまい	35	昇る天太、守り主を　願われて
36	るーぐぬス　あうとぅぬス　にがまい	36	龍宮主、青渡主を　願われて
37	いム　てぃなでぃ　かじ　てぃなでぃ	37	海　手撫で、風　手撫で
38	やぱらみ　たてぃ　ぱかり　うるさまち	38	柔ら雨の　適量を　降ろして　下さい。
39	んなフきゃぬ　ゆなうにーぬ　うかムま	39	ンナフキャの、世直し根の　お神は
40	なんかてぃー　やうかてぃー　むみゃまい	40	七日間も、八日間も　いらっしゃって
41	にスぬ　とぅー　ぱいぬ　とぅー　うかムま	41	北の　渡（海）、　南の　渡の　お神は
42	てぃんにゃから　ななうな	42	ティンニャから　七回も
43	スたいから　ななうな	43	スタイから　七回も
44	とーまゆーな　うりさまい	44	あちこちに　お降りなさり
45	んなフきゃぬ　うかムま	45	ンナフキャの　お神は
46	さスぬ　フー　まむりゃまイ	46	サス（氏子たち）の　運を　お守りなさり
47	うぷゆー　まむりゃまイ	47	大世を　お守りなさり

【語注】〇あがイてぃだ　まむイぬス　朝日の擬人神化であろう。朝日神。**〇るーぐぬス　あうとぅぬス**　海の擬人神化であろう。龍宮神。**〇んなフきゃ　ゆなうにーぬ　うかム**　ンナフキャ祭祀の時に「世直しの根」（豊穣がもたらされる根となる異郷）から来訪するお神、の意であろう。**〇てぃんにゃ**　天上界。天界。**〇スたい**　地下界。地界。**〇さス**　神女の呼名であったり、広義にはウイヌプヤー・ムトゥの氏子たちを指したりする。ここでは後者であろう。**〇フー**　健康や長寿など福運、の意。**〇うぷゆー**　豊穣・豊漁など多くの富、の意。

【解釈】この段落では、朝日神、龍宮神を呼び出して褒め称えると、両神に降雨を乞い求めている。いわゆる雨乞いである。続いてンナフキャ祭祀に来訪した世直しの神々（豊穣・豊漁の神々）に七日間、八日間の滞在を、北の海・南の海に鎮まる神々には天上界や地下界を通って七回に及ぶ降臨（来臨）を、それぞれ乞い求めている。そして再びンナフキャの神々を呼び出すと、ウイヌプヤー・ムトゥの氏子たちの健康と長寿、及び生活の糧となるウプユー（豊穣・豊漁など多くの富）の保障（保証）を、それぞれ乞い求めている。

48	ピとぅぬ　みーどぅ　あうスば	48	人が　見てぞ　青芝。
49	かムぬ　まいんな　ぬぬでぁム	49	神の　前には　布で　ある。

（未完）　　（未完）

【語注】〇ピとぅぬ　みーどぅ　あうスば　神女たちがその身に纏う蔓草は、人間の目には「青芝」にしか映らない、の意。**〇かムぬ　まいんな　ぬぬでぁム**　神の前では「布」（着物）である、の意。

【解釈】この段落では、人が見たら「青芝」も神の前では布（着物）であると歌って、神女たちの草装・木装の意味を氏子たちに告げている。このことについては、この後の解説で取り上げる。

なお、このヨンテルの歌詞にはまだ続きがあるということであったが、その続きを私は聞き取っていない。

*　　*　　*

冒頭でも述べたように、このヨーンテルの神歌は友利のンナフキャ祭祀の時、ウイヌプヤー・ムトゥの神前で神女たちが草装・木装して輪舞しながら歌ったものであろうと推測される。宮古では一般に、ンナフキャ祭祀にはユー（豊穣・豊漁などの富）を運ぶ龍宮の神々が人里を訪れて、そのユーを各家に分配して回るということで、この祭祀は琉球諸島に広く分布する来訪神信仰の一形態であると見ることが出来よう。

さて歌詞は、地元でカンナーギ（神名上げ＝神褒め）と呼ばれる内容で、神々を呼び出して褒め称えることにより、その神々に氏子たちの健康・長寿や生活の糧となる豊穣・豊漁などを保障（保証）してもらおうと意図するものである。歌詞の中ではンナフキャの神々に加え、地元友利に所在の各ムトゥの祭神、隣り合う砂川集落に所在の各ムトゥの祭神、それに海神、天神、地神などが呼び出されている。これらを見るとンナフキャ祭祀にはその神性を異にする様々な神々がウイヌプヤー・ムトゥの神前に動員されていることに改めて気づく。

最後の段落 48・49 番では、人が見たら「青芝」も神の前では布（着物）であると歌って、ムトゥの氏子たちへ神女たちの草装・木装の意味を告げている。つまり、神女たちの草装・木装は神々の姿であるということである。第三者的に言えば、神女たちの草装・木装は神々の姿の具現化・可視化ということになるが、そうすると神女たちは、この神歌を神々の立場で歌っているとも言えよう。歌詞の全 49 番のうち、その 36 番までが最後に「にがまい」（願われて）と尊敬語をもって歌うのも、そう考えると納得できる。

旧城辺町の友利という一集落の神歌ではあるが、宮古には類歌も多いことから、そうした類歌を解釈する上でもこのヨンテルの歌詞は参考になろうと考える。本誌上でこの神歌を紹介する所以である。

* 本稿をまとめるに当たり、宮古島市史編さん事務局の新垣則子さんから、いろいろと情報を寄せて頂きました。記して感謝申し上げます。

（もとなが・きよし　民俗エッセイスト）

訂正　本誌の前号（第29号）に掲載した拙論「nisïnja:-mutu-nu-fusa　ニスニャー・ムトゥのフサ」の中に、誤りがありましたので、訂正させて頂きます。

〇176ページ　下から17行目

狩俣村立ての神話では語り伝えている ⇒ 狩俣のsïmadati-nu-fusa（島＝村立てのフサ）では歌っている。

〇180ページ　上から14行目

tindau聖地 ⇒ 聖地tindau

〇181ページ　下から2行目及び3行目

神衣 ⇒ 草冠

〇183ページ　上から12行目

座すと待機していて ⇒ 座して待機していて